

1920-40年代に石宙明と関係 のあった日本の昆虫学者

Japanese entomologists related to
D.M.Seok in the 1920-40s

Toshiya Hirowatari^{d1}, Neung-Ho Ahn², Toshiharu Mita¹,
Wanggyu Kim² and Jinwhoa Yum²

¹Entomological Laboratory, Kyushu University, Fukuoka, Japan

²National Institute of Biological Resources, Incheon, Korea

石宙明 SEOK, Du-Myung (1908–1950)

蝶類研究に多大な貢献をした韓国初の昆虫学者

生涯を通じて75万個体の蝶の標本を収集したが、朝鮮戦争でコレクションは完全に焼失

現在までに石のコレクションのうちわずか32個体の蝶の標本のみが韓国に残存

日本の九州大学昆虫学教室で収蔵標本を調査した結果、1930年代から1940年代にかけて石が朝鮮半島で収集した標本(合計35種129個体)が保管されていることが明らかになった。

これらの標本は韓国国立生物資源館(NIBR)に移管された。



岡島銀次 OKAJIMA, Ginji (1875–1955)

1921年から1922年にかけて九州大学の動物学・昆虫学・蚕学の三講座に相当する教室を創設

現在の昆虫学教室の初代教授江崎悌三が就任する以前に昆虫学関連の文献を整備するなど、教室の基礎を築いた。

石宙明は農学を学ぶために1926年に日本の鹿児島高等農林学校に入学。

その後博物学に興味を持ち、同校の教員であった岡島銀次に師事して昆虫学を修めた。



岡島は1920年代後半に石宙明を指導。石は岡島に感謝していた。

Neptis okajimai(オカジマミスジ)と Zephyrus ginzii(ギンジシジミ)

石宙明 (1936)

オカジマミスジ及びギンジシジミなる
2新種の蝶に就て [附] 金剛山産蝶類目録

(圖版 1 個)

石 宙 明

朝鮮開城松都高等普通學校

(昭和11年1月9日受領)

I. *Neptis okajimai* SEOK nov. sp. オカジマミスジ(新稱)(第1及び第2圖)

♂. *Neptis phillyra* ミスジテフ♂に殆ど一致し、異なる點は次の如くである。

1. 白斑全體が稍小。
2. 前翅表面第2, 3 兩室の兩白斑は遙かに小にして而も稍不明瞭。
3. 中室斑は其痕跡のみ僅かに認められ全缺。

翅開張 59 mm, 前翅長 31 mm, 體長 19 mm.

Type は金剛山で 1935, VI. 24. 禹鍾仁君によりて採集され著者が保管。

Paratype ♂ 1 個。金剛山で 1935, VI. 19. 禹鍾仁君採集。前翅長 32. 著者が保管。

II. *Zephyrus ginzii* SEOK nov. sp. ギンジシジミ(新稱)(第3及び第4圖)

♂. *Z. enlha* や *Z. attila* 等と同じ group のものであるけれど、然し何れにも似もつかぬ特異のものである。

複眼: 眞黒色, 周縁は眞白, 其對照極端なる故鮮かに見ゆ。

觸角: *Z. attila* と殆同なれど先端黃褐色部を殆ど欠す。

縁毛: 先端白色にして内側は黒褐色。白色部は後翅殊に肛角部附近で發達す。

上面: 全面黒褐色なれど裏面の條紋は微かに透視し得。肛角部附近に *Z. attila* の♀に於けるが如き白鱗微かに散在し、肛角突起部には赤斑を認め得る。尾狀突起は甚だ長くして先端白色, 共直上第3脈外縁部にも小突起がある。體毛及び後翅内側面は軟毛稍發達す。

下面: *Z. attila* の前翅の中室斑の如き斑は前後兩翅共にあるも、後翅のは甚だ細くして明瞭なりとは言ひ難く、前翅のも *attila* の程太くはない。前後兩翅共外縁内側に2列に平行せる不明瞭なる條紋があり、後翅に於ては其外側線上に第1a室即ち肛角突起部及び第2室には各黒點と橙色部とよりなる顯著な斑が認められる。上記の亞外縁條紋と中室斑との中央部には前後兩翅共明瞭なる黒褐色の横斷條紋があり、後翅に於ては第2脈を中心に彎曲してカラスジミに於けるが如く全體W字狀を呈す。其横斷條紋は前縁から後縁又は内縁に及ぶにつれて漸次細くなる。

翅開張 88 mm, 前翅長 20 mm, 體翅 18 mm.

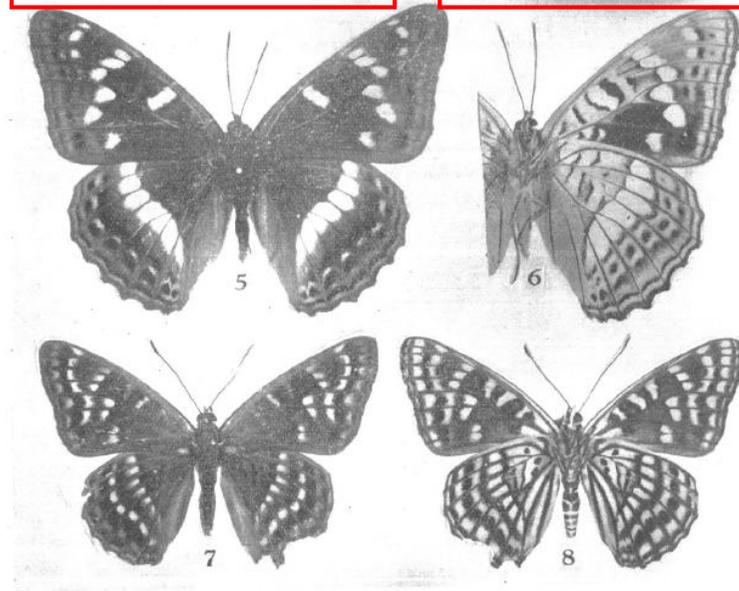
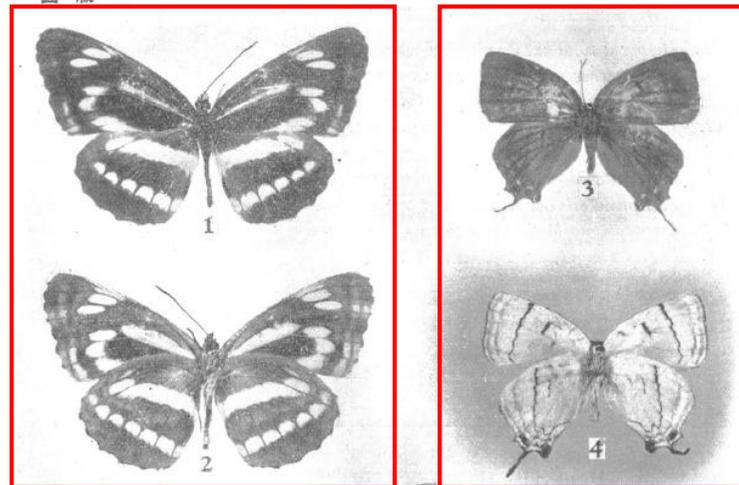
Type は金剛山で 1935, VII. 4. 禹鍾仁君によりて採集され、著者が保管。

上記2新種は余の恩師岡島銀次先生の御尊名に因んで命名したものである。

N. okajimai

Z. ginzii

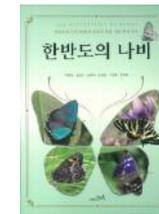
圖版 II



石宙明: オカジマミスジ及びギンジシジミなる2新種の蝶に就て

石宙明は2種のチョウを新種として記載し、岡島銀次に献名した。

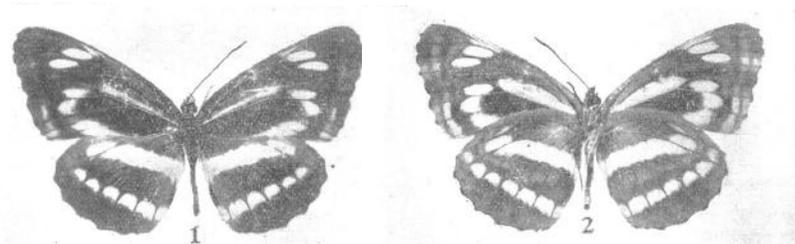
Neptis okajimai (オカジマミスジ)



세줄나비

Neptis philyra Ménétriès, 1859

세줄나비 *Neptis philyra* Ménétriès, 1859

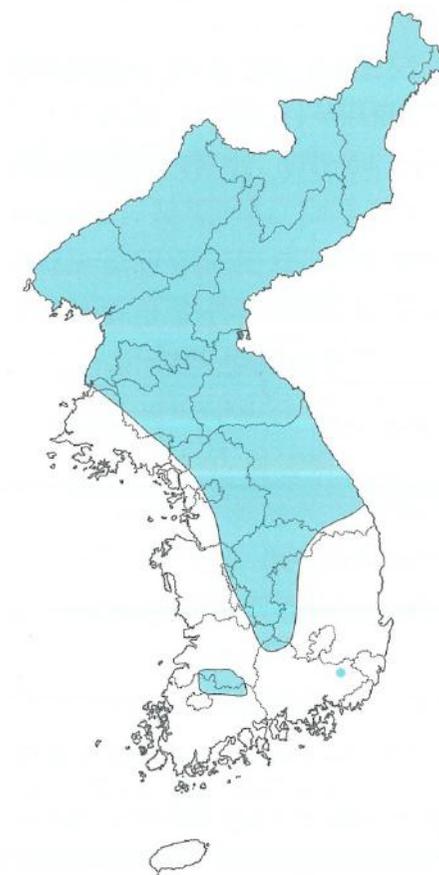


Neptis okajimai Seok, 1936

現在の学名 :

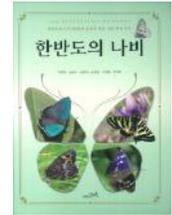
Neptis philyra Ménétriès, 1858

(*okajimai* は *philyra* のシノニム)



Joo et al. (2021)

Zephyrus ginzii (ギンジジジミ)



깊은산부전나비 *Protantigius superans* (Oberthür, 1914)



♂위 | 해산 | 32mm



♂아래 | 해산 | 32mm



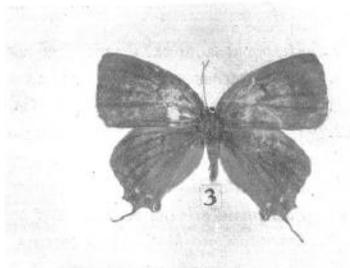
우위 | 해산 | 37mm



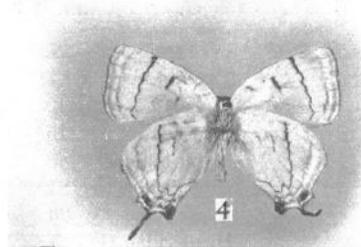
우아래 | 해산 | 37mm

깊은산부전나비

Protantigius superans (Oberthür, 1914)



Zephyrus ginzii Seok, 1936



現在の学名:

Protantigius superans ginzi (Seok, 1936)

亜種の有効名として存続

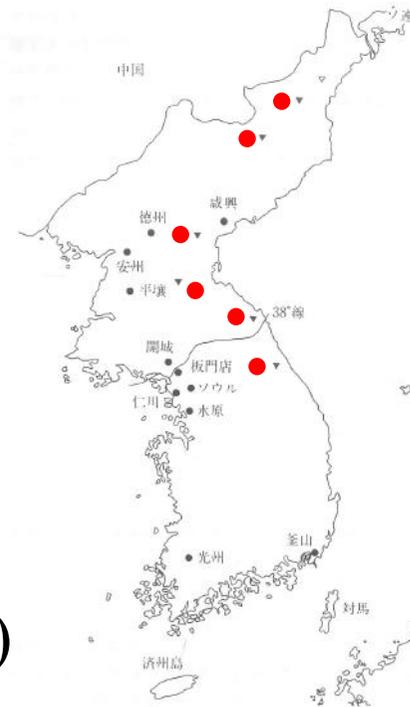
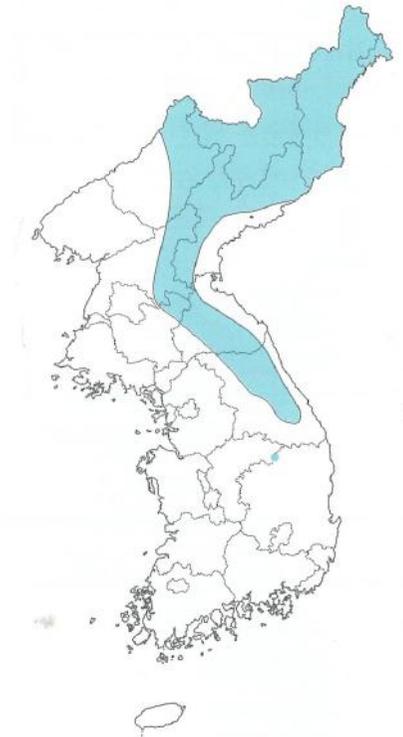


図2 南北朝鮮(韓)半島の地図。
●, ▽は石の『分布図』にもとづいた、ギンジジジミの産地を示す。

Sibatani (1987)



Joo et al. (2021)

江崎悌三 ESAKI, Teiso (1899–1957)

九州大学昆虫学教室の初代教授。研究の基本となる昆虫標本と文献の収集整理に取組み、日本の昆虫学研究の基礎を構築

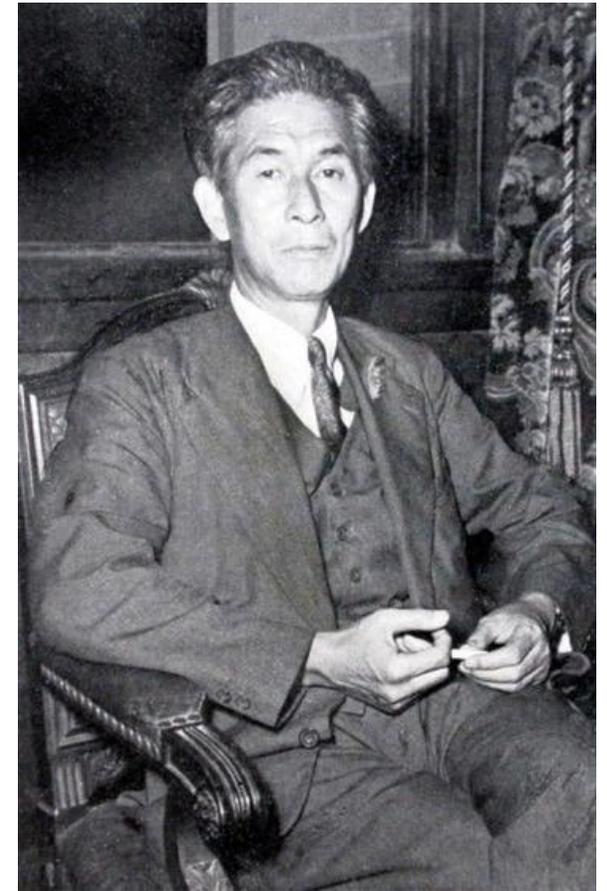
カメムシ目とチョウ目の系統分類に従事し、朝鮮半島を含む東アジア、琉球列島、ミクロネシアなどで採集探検旅行を行い、莫大な標本を収集



江崎文庫



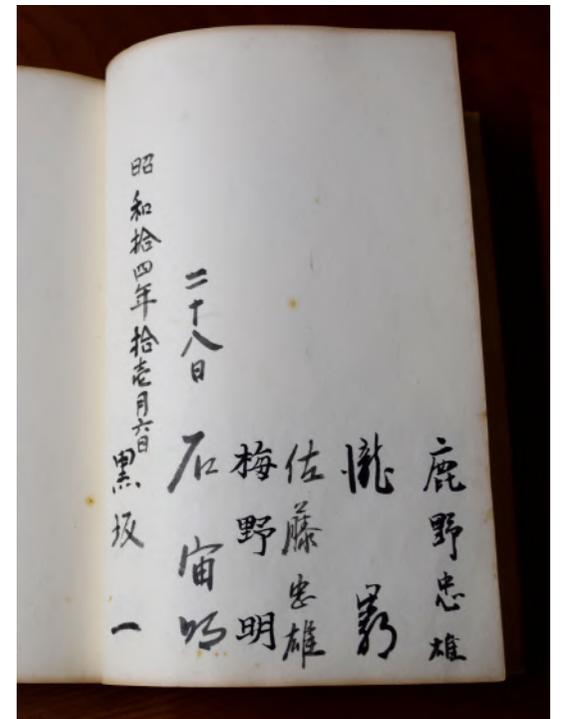
江崎コレクション



1930年代に石宙明と交流

芳名録

九州大学昆虫学教室には、外部からの来客者が署名する芳名録が残されているが、1936年10月28日に昆虫学教室を訪問した時に石宙明が署名を残している。



採集ラベル

1935–1937年に採集した標本ラベルに「石宙明氏寄贈」の記述があることから、その当時に標本が石宙明本人から九州大学に寄贈されたと思われる。



柴谷篤弘 SIBATANI, Atuhiro (1920–2011)

生物学者・鱗翅目の分類学者 京都大学出身

鱗翅目の交尾器に関する出版した際に、石宙明から朝鮮半島産の材料の提供を受けるなど、直接交流

1985年と1987年に二度にわたって石宙明について日本鱗翅学会の雑誌(やどりが)に紹介

1994年に三枝豊平、広渡俊哉と共著で東アジア産ゴマシジミ属(*Maculinea*: 現在は*Phengaris*)のレビジョンを出版



Sibatani (1985)

やどりが 123号 (1985)

石宙明 (セオク・ドウミョン)

柴谷 篤弘

Seok : Du-myong
by A. SIBATANI

いまの日本の鱗翅学会の若手に、石宙明 (석주명) という名が、どれくらい親近感をもつのかは知らない。私が石氏と知りあったのは1940年ごろだった。かれは私より7-10歳くらい年長だったろうか。当時朝鮮半島は日本の領有下にあり、朝鮮民族は日本人に同化すべきであるという政策のもとに、言語をふくむ固有の文化を失ってゆく方向に駆り立てられていたと理解する。しかし現実には、少なくとも当分の間朝鮮民族は日本の第二級市民であり、低賃金労働力として取り扱われることが多かった。

このような条件下で石氏は鹿児島高等農林専門学校を卒業し、岡島銀次氏(キリンマドリソジミの命名者、ギンソジミの名を石氏から捧げられた人)に師事して昆虫学を修めたという。石氏の朝鮮産蝶類についての最初の論文は1932年に1篇出版されており、1934年には鹿児島農林紀要に、朝鮮のチョウについての総合報告(第一報)150ページ、10図版のものが発表されている。これらの論文にふくまれる欧文は、主にエスペラントで書かれている。

1940年当時、石氏の活動はひとつの頂点に達し、朝鮮半島の蝶のぼう大な蒐集にもとづいて、積極的に朝鮮のチョウの分布記録の更新、分類法の改定、新類位の命名などの報文を *Zephyrus*、「動物学雑誌」をふくむ各種雑誌に発表していた。1939年には *Royal Asiatic Society* の朝鮮支部から *A Synonymic List of Butterflies of Korea* (xxxii+391ページ、2図版) を出版していた。

しかし石氏の標本は、完全品を尊重するような「非科



しばたに・あつひろ
関西医科大学教養部教授
著書に発生現象の細胞社会学(講談社)、今西進化論批判論(朝日出版社)、反科学論(みすず書房)などあり。
〒573 枚方市宇山東町18番19号
関西医科大学教養部生物学研究室



故・石宙明氏、おそらく1930~2年頃(林田年行氏の好意による)

学的)ないし「骨董趣味的」な手段をしりぞけたということで、見てくれはよくなかった。また石氏は、種々の類位を「変異が連続するかどうか」の観点からだけ見て、多くのシノニムを作る傾向が強かった。しかしそれでもなお *Ladoga doerriesi* デリースイテンジの自帯の細い型のように、あるいは済州島の *Plebejus argus* ヒメソジミと *Lycæides argyrognomon* ミヤマソジミのように、当時の一般の認識に先んじて、混同されていた種を区別するような、すぐれた観察もおこなっていた。

しかし全体として、日本のチョウや昆虫の研究者からは、石氏はかなり手荒い手法の科学者だと見られていたようである。だが同時に、人種差別の印象を石氏個人に与えぬように、細心の心くばりをしていた昆虫学者が少なくなかったという印象を、私はうけたようにおもう。

一方私はといえば、交尾器検査のため、朝鮮半島の材料についての援助を石氏に依頼し、こころよく引きうけて頂いた。コンゴウソジミ、チョウセンアカソジミ、ベニボシイモチモンジなどについての仕事は、氏の援助なし

Sibatani (1987)

やどりが 128号 (1987)

再説・石宙明 (ソク・ジュミョング)

柴谷 篤弘

SEOK D.M. (Sök Ju-myong) revisited
by Atsuhiko SIBATANI

まえがき

本誌に最近私は「石宙明(セオク・ドウミョン)」と題して(柴谷, 1985)、当時私が故石宙明氏について知りえたことを、誤りを覚悟のうえでまとめて見た。これが端緒となり、私はその後韓国の昆蟲研究家たちと連絡をとることができ、また1986年4月~5月に、再び短期間ソウルを訪れて、石氏についての事実をさらに探索した。この期間もっとも重要な事件は、石宙明氏の実妹石宙善氏と文通・面識の機をえて、石宙明氏の最後とその後の事情をいっそう深く知ることができたことと、私の上の記事とほとんど時を同じくして、ソウルで発行された、李炳哲(イ・ボンジャ Chol)著の石宙明評傳(李, 1985)(図1)を、石宙善氏から贈られ、大阪在住の黄万石(ウォン・マンソク)氏をわずらわして、その重要部分を理解しえたことであった。これらの新しい知識によって、私の上の小文は、明らかに大幅に訂正・補足せねばならない。それについて以下に記す。

1954年、日本動物分類学会で故高島春雄氏が学会誌に石宙明追悼記を書いたというが(李, 1985: p. 284)、私は今日までその原文を参照していない。

生い立ち・教育・就職

石宙明は、1908年11月13日平壤(ピョンヤンヤン) (図2参照、以下同様)で3男1女の次男として誕生。兄石宙興(ジュホニョク)は北朝鮮に止まり現在消息不明。弟石宙一(ジュイル)は皮膚科医師、1981年没。妹宙善については後に記す。父石承瑞(スンソク)、母金穀植(キム・ウシク)。父はピョンヤンヤンで当時最大の料亭又春館(ウンチュングワン)を経営、比較的富裕な一家であった。

1919年(大正8年)3月1日いわゆる3.1独立運動に刺激され、当時代表的な私立民族学校、長老系ミッションスクール崇実(スジョンシル)高等普通学校(戦前の中学

校、戦後の高等学校に相当)に1921年に入学、在学時演劇運動に加わり拘禁されたこともある。翌年同盟休校事件で退学。マンドリン、ギターに才能を示し、一時はギタリストになることを考えた。1922年秋開城(ケソン)の松都(ソングド)。開城の旧名)高等普通学校に転学、そ



図1 李炳哲著『石宙明』(左)と石宙明の遺著『韓国産蝶類分布図』。

石宙明のハンダルの表記は、柴谷(1985)では第2,3字が誤っていて、この写真に見られる本の表紙にあるのが正しい。その第2字は Ju に相当する。石宙明は、エスペラントによって影響を受けたのに相違なく、ju は元々発音されるから、おそらく Dju と綴ったために、イニシャルに D があられたのであろう。石はまた、日本語のフを cu という例外がある。分布図のほうは、「韓国」とあるが、もちろん半島全部を対象としている。「朝鮮」の呼び名、とくにその第2字だけを用いてつくる日本語の漢字2字の熟語は、韓国では歴史的な使用例にもとづいて、差別用語としてはげく忌避される(例: 北朝鮮派記)。

Sibatani (1987)

柴谷は韓国を訪問し、石の妹から取材



図4 石宙明の妹、石宙善民俗博物館長（1986）。

背に原稿のほかわずかに裁縫ばさみだけをいれた荷を負い、立ったままで24時間をすごし、釜山にたどりついた。その西8kmの下端(ハーダン)という農村の由緒ありべな物もちの家をたずね、事情を説明して家の片隅を借りうけ、ミシンを借りて人々衣服をつくり、草とりを手伝い、自分だけでなく、同家に借りずまいを許された南へ逃げて来た四家族を支えるに十分な食料を手にいれることができたという。

停戦後彼女は遺稿をもってソウルに帰り、さらに服飾史の材料を各地に求め、比較的少い資金で見るとべき蒐集の成果をあげた。こうして1981年、ソウルの檀國大学校



図5 檀國大学石宙善記念民俗博物館の正面。
階段を降りる左の白服の女性が石館長。

杉谷岩彦 SUGITANI, Iwahiko (1888–1971)

東京大学・京都大学出身 数学教師

東アジアを中心として世界各地の蝶蛾を収集

杉谷コレクション: 江崎教授時代に九州大学に寄贈
蝶蛾類の標本約36,000点 現在では調査や入手が
困難な朝鮮半島北部の標本を多数含む

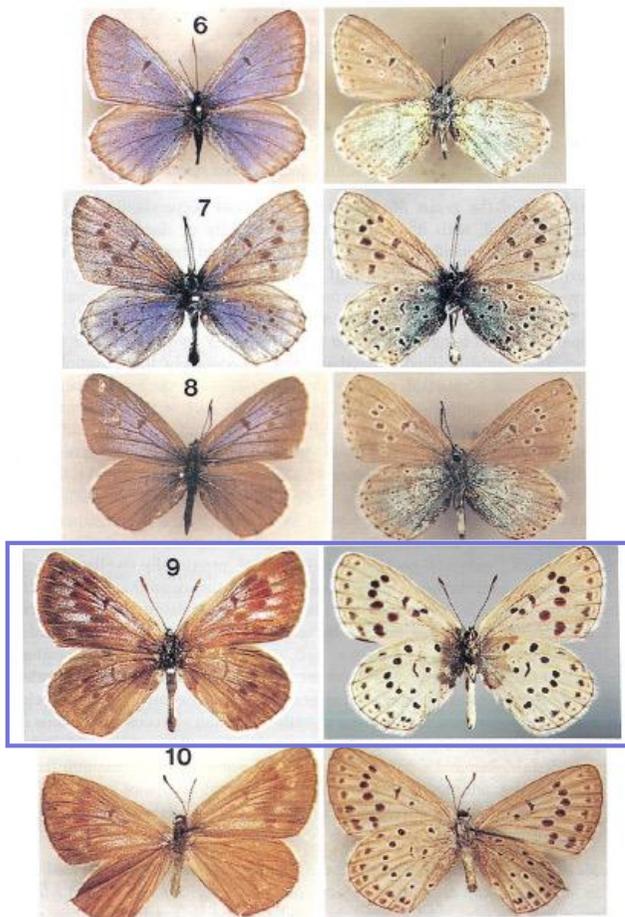
石宙明とも交流



杉谷コレクションを利用した東アジア産ゴマシジミ属 *Maculinea*の分類学再検討

164

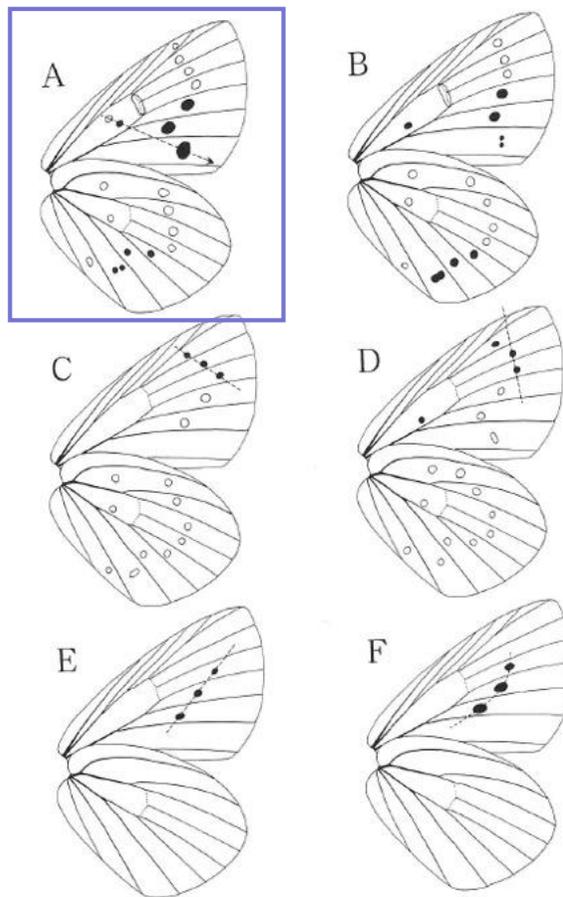
Atuhiro SIBATANI, Toyohi SAIGUSA and Toshiya HIROWATARI



Figs 6-8 (see also Fig. 14). *M. arion xiaheana* (Murayama, 1991), Xiahe, Gansu, China. 6: ♂, holotype. 7: ♂. 8: ♀.
Figs 9-10 (see also Figs 18-24). *M. kurentzovi* sp. nov. 9: ♂, holotype, Handaeri, Ryanggang-Do, N Korea. 10: ♀, paralectotype of *Lycaena kondakovii* Kurentzov, 1970, Partizanskaya River, Primor'e, Russia.
Figs 11-14 (see also Figs 25-28). *M. arion* (Linnaeus, 1758), subspecies. 11-12. *M. arion assuriensis* (Sheljuzhko, 1928), Hoeryong, Hamgyongbuk-Do, N Korea. 11: ♂.

174

Atuhiro SIBATANI, Toyohi SAIGUSA and Toshiya HIROWATARI



Notes on *Maculinea* from the East Palaearctic Region

193

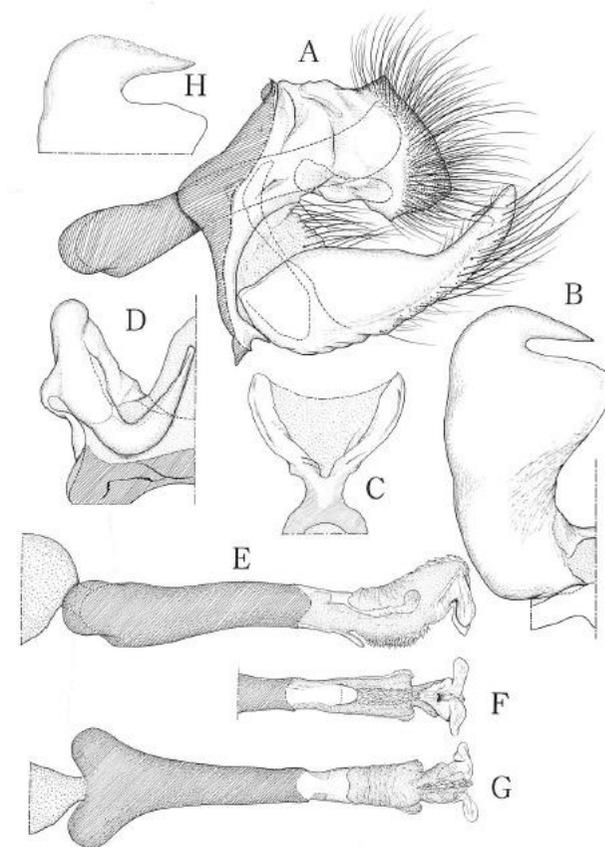
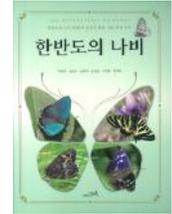


Fig. 40. *M. kurentzovi* sp. nov., paratype, Russia, S Primor'e, near Krounovka, 29. vii. 1990 (Sibatani, MS).

Sibatani, Saigusa & Hirowatari (1994)

Phengaris kurentzovi (Sibatani, Saigusa & Hirowatari, 1994)



북방점박이푸른부전나비

Phengaris kurentzovi
(Sibatani, Saigusa et Hirowatari, 1994)

북방점박이푸른부전나비 *Phengaris kurentzovi* (Sibatani, Saigusa et Hirowatari, 1994)



灌木が混じる草原地帯に生息

韓国では江原道で記録があるが、分布は限定的



Joo et al. (2021)

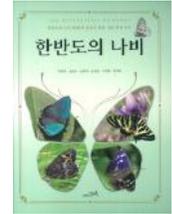
石宙明が採集した昆虫標本



九州大学昆虫学教室(2024年9月24日)

九州大学から韓国国立生物資源館への標本の移管

石宙明が採集した昆虫標本(1)



ヒメシジミ *Plebejus argus* (Linnaeus, 1758)



산꼬마부전나비

Plebejus argus (Linnaeus, 1758)

韓国では濟州島のみ分布する希少種。朝鮮半島では、北朝鮮の北部に分布。

Shirôzu & Sibatani (1943) は石が濟州島の漢拏山山頂で採集した標本をもとに新亜種 *Plebejus argus seoki* として石に献名。



Joo *et al.* (2021)

石宙明が採集した昆虫標本(2)

チョウセンキバネツトンボ *Libelloides sibiricus* (Eversmann, 1850)



朝鮮半島全域に分布。湿性の低灌木林や草原的環境に生息しているが、このような環境の減少につれて個体群も減少している。

石宙明が採集した昆虫標本(3)

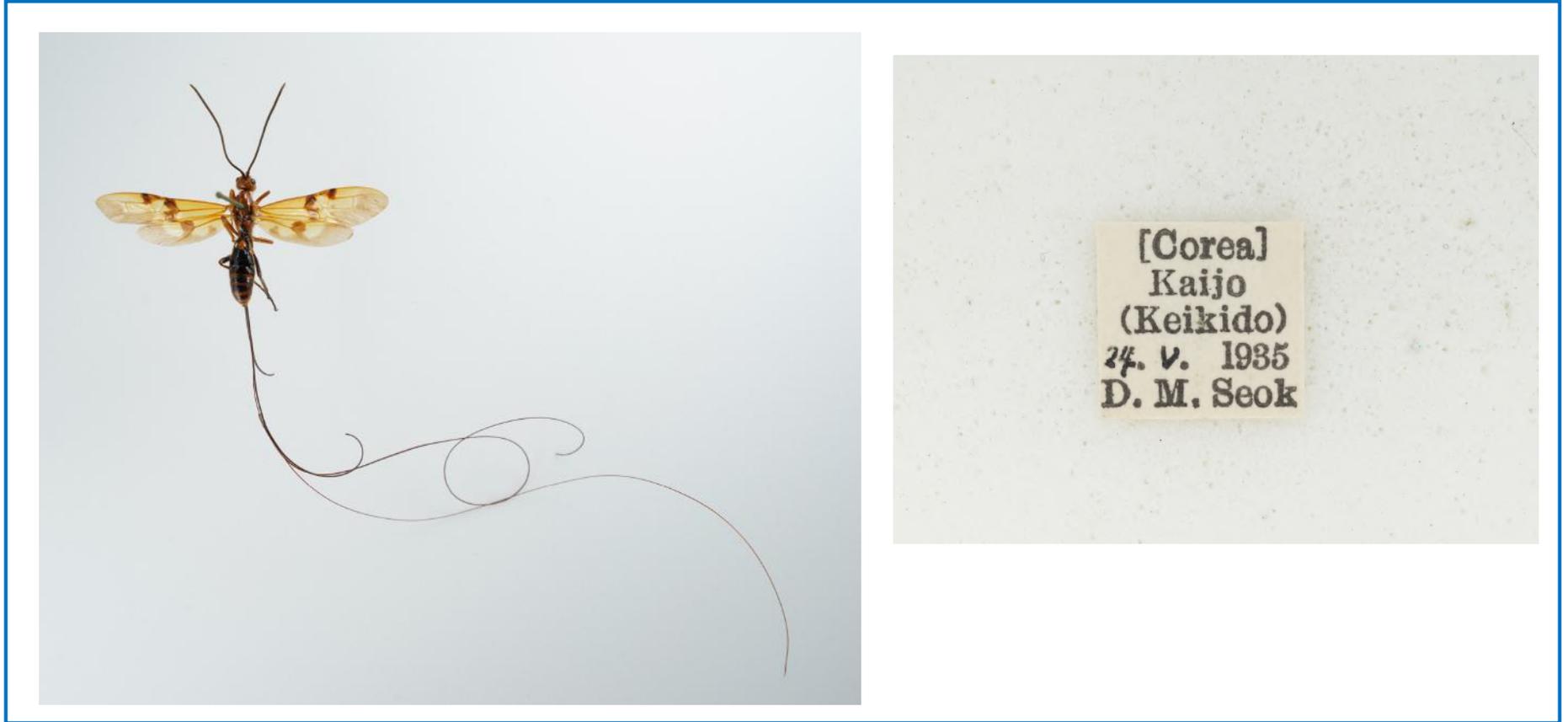
シータテハ *Polygonia c-album* (Linnaeus, 1758)



朝鮮半島では江原道以北に分布。Nomura (1937)は石が採集した標本をタイプとしてに*coreana*という亜種小名を与え、さらにはこの亜種内にf. *seoki*を記載した。

石宙明が採集した昆虫標本(4)

ウマノオバチ *Euurobracon yokahamae* (Dalla Torre, 1898)



大型の寄生蜂で、長い産卵管が特徴的。大型のカミキリムシの幼虫に寄生し、朝鮮半島、日本列島を含むアジア各国に分布するが、近年は減少傾向にある。

おわりに

今回、石宙明の標本に関して韓日が共同で貴重な標本の発見・保存に貢献できてうれしく思います。

これを契機に、韓日の共同研究が続くことを祈念しています。

ご清聴ありがとうございました。